

辟雍会東京都支部(東京辟雍会)設立される！

本年8月23日、長年にわたり懸案事項となっており、辟雍会東京都支部が設立されました。

がら、一社同窓会と辟雍会とが今後とも協力して力強い歩みを進めていくことを確認しました。

この設立総会には、佐々木幸寿東京学芸大学現学長をはじめ、歴代元学長の鷺山恭彦、村松泰子、出口利定の各氏や荒尾禎秀辟雍会初代会長にご出席いただきました。また、一般社団法人東京学芸大学同窓会（以下「一社同窓会」）からは茅原直樹現理事長に加えて、元理事長の吉野尚也、加藤正克、高橋武郎、森富子の各氏にもご出席いただき、辟雍会といたしましても大変意義深い設立総会となりました。

議事は二宮修治支部設立準備委員会委員長の司会の下で肅々と進められ、来賓のご挨拶、規約の承認、新役員の選出、近藤由紀彦初代支部会長（本学社会科卒）の挨拶等が行われました。それに続いて、同じく本学社会科の卒業生である市川寛明江戸東京たてもの園園長に記念講演として「たてもの園」の見どころを紹介していただきました。総会出席者は50数名、その後に関われた祝賀会はそれを上回る70数名の方々の参加を得て、盛大かつ和やかに支部の発足を祝いました。

なお、本会はこれまで、東京都支部の設立が東京都公立学校の先生方を中心に活動されてきた一社同窓会の活動に支障をきたさないように細心の注意を払ってまいりました。辟雍会の創立から20余年、一社同窓会と辟雍会とが連携・協力する活動スタイルを定着させてきた実績の上に立って、昨秋から両者の間で真摯に意見交換会を重ね、さらに今春からは設立準備会で細かな検討を進め

私は、この準備作業に関わっていただいた全ての方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。そして、辟雍会東京都支部に結集される皆様には、上記の確認点に基づき、想像力溢れる活動を展開していただきますようお願い申し上げます。また、長年この学芸大学で苦楽を共にされてきた元教職員の皆様にもこの支部活動に積極的に参加していただきたいと思っております。東京という地の利を生かしたさまざまな交流活動やイベントを考案してみてください。圧倒的な数の卒業生や元同僚が暮らすこの東京で、学科や専攻を超えた横断的な結びつきや年齢・世代を超えた縦断的な連携を通して学芸大学関係者の親交がいつそう深められ、ひいては一社同窓会共々、辟雍会が全体としてこれまで以上に力強いエールを学芸大学に送ることのできる日の来ることを願ってやみません。

そのためにも先ず、東京都に在住もしくは東京都内で何らかの活動をしておられる学芸大学関係者の皆様には早急に辟雍会東京都支部の会員になる手続きを取っていただきたいと思います。辟雍会のホームページから簡単に手続きできるようになっております（学校教員の方々には一社同窓会への加入をお勧めいたします。同じく学芸大学のホームページをご参照ください）。

（辟雍会会長 馬淵貞利）

設立総会会場



学芸大学キャンパスガイド③ 学芸大学生協



「やっと2限が終わったね！大生でラーメン食べよう！」「いいね！」
「小生へ行こうよ。ジュース1本奢ってあげるから。」「ありがとう!!」

学芸大学在学中にこのような会話を交わした経験のある方も多いのではないのでしょうか。今回はこうした学芸大生の日常生活の場となっている生協施設について紹介します。

東京学芸大学生活協同組合は1960年に設立され、1965年に法人化された組織です。それ以降、60年以上にわたり学芸大学の学生・教職員に憩いの場を提供してきました。学芸大学生協の主要な建物は1971年に現在の場所に建設され、以後何回かの増改築を経て現在の姿になっています。それは主に3つの建物で構成され、それぞれ「小生」、「大生」、「コパン」と呼ばれて親しまれています(写真1・写真3)。

「小生」は2階建ての施設で、1階はお弁当や飲み物、アイスクリームなどを販売しているコンビニエンススト

アのようにっており、2階は書籍や文房具の販売コーナーのほかに、運転免許の予約やパソコンのサポートを行うサービスカウンターもあります。また、卒業式シーズンには「小生」に袴や振袖のレンタルブースも設けられます。さらに「小生」では、学芸大学のオリジナルグッズも販売しています。2024年度からその種類が大幅に増え、Tシャツから文房具、湯飲みやキー・ホルダーまで揃っていて、受験生や教育実習生、OB・OGの方々にも好評です。毎年7月に実施される受験生向けのオープンキャンパスや秋の小金井祭の時にはオリジナルグッズの一般向け販売も行われますので、是非一度販売コーナーを覗いてみてください(写真2)。また、「小生」で売られている「大生弁当」と「焼き立てパン」も健在です。「大生弁当」は、かつて生協前の屋外テントで販売していましたが、現在は「小生」1階の保温室に陳列して販売しています。「焼き立てパン」はコパンのオーブンで毎日焼いたものを提供しています。



写真1 小生南側・この奥に大生がある。



写真2 オリジナルグッズ



写真3 コパン入口(第二むさしのホール)



写真4 山際専務理事と筆者

「大生」は、いわゆる「大食堂」です。ここではラーメンやカレーライスなどをはじめとする定番料理のほかに、週替わりで季節の麺類を楽しむことができ、バリエーションが非常に豊富です。昼休みには長蛇の列ができ、2限と3限の授業がある人は時間がギリギリになってしまうこともあります。ちなみに私の最も好きなメニューは「冷やし担々麺」です。なお、「大生」の食堂は営業終了後も開放されており、学生が課題研究の作業をしたり、友達と軽食を食べながら会話を楽しんだりする場所として使われています。

「コパン」は、上記の2つの施設とは少し離れた場所にあり、第二食堂の役割を果たしています。「大生」が定番料理をメインとする食堂であるのに対し、コパンではアラカルトのメニューを選んで食べることができます。また、ここは「大生」よりも空いているため、比較的ゆっくり昼食を楽しむことができます。2階にも食事のできるスペースがあり、イベント会場として利用することもできます。生協の学生委員会が主催する新入生入学準備説明会などもここで行われます。

学芸大学生協は、このような学芸大学の食堂兼商品販売施設としての役割を果たしているほか、学生がより良い学生生活を送れるような取り組みにも力を入れています。たとえば、学芸大学ではもう20年以上前からノートパソコンが必携となっていますが、パソコンの使い方がよく分からない人や、パソコンに不調やトラブルが生じた人のために、「PCサポートセンター」を設けています。ここでパソコンの修理をしてもらうことができ、修理中は代替機を貸し出してもらうこともできます。また、サービスカウンターでは自動車免許合宿の予約なども受け付けており、学芸大生にとって非常に心強い支援センターのような役割を果たしています。

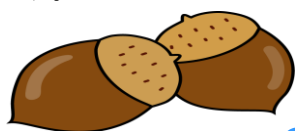
現在、学芸大学生協の専務理事を勤めておられる山際まり子氏は、次のように語っておられます。

私は30年近く大学生協という場で働いてきましたが、学芸大生協には2004年から6年間勤務し、その後いくつかの生協への異動を経て、2021年に再び戻ってきました。戻ってきた時はちょうどコロナ禍で、授業もオンラインが中心。久しぶりに戻ってきた学芸大に学生の姿がほとんどなく、とても寂しかったことを覚えています。私が最初に学芸大生協に勤務していたころは、食堂も朝食・昼食・夕食と営業し、活気にあふれていました。当時、旅行部門の担当者だった私は、学生の帰省や運転免許の受付だけでなく、留学・語学研修、ゼミ・サークル合宿、スキー旅行など、学生生活のさまざまな場面に関わっていました。コロナ禍を経て学生のキャンパスでの過ごし方も変わり、生協の役割やサービスも変化しています。それでも＜学生が大学にいて、生協に来てくれる＞という当たり前の光景が実は生協にとって何より大切だと感じています。大学生協はこれからも時代に合わせて変化しながら、学生の皆さんの大学生生活を支えていきたいと思っています。

また、今年から購買部の店長に就任された石村美帆さんは、「学生の皆さんから小生の呼び名で親しまれている生協購買部は、飲み物・食べ物から大学グッズ、教習所の受付など幅広い内容で学生の皆さんの学びを支える施設となっています。これからも組合員の皆様のお声を反映し、学生生活が充実したものになるようなお店づくりに努めていきます。」と語っておられます。

このように、東京学芸大学生協で働く人びとは、これからも生協が学芸大学の憩いの場であり続けるよう、日々努力しておられます。

(文責：B類理科4年 北村 拓磨)



News

東京都支部の関連記事は機関誌『辟雍』にも掲載いたします。